
はんこたんな幻想 一真夏の乙女の夢一

本間敏治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はんこたんな幻想 ― 真夏の乙女の夢―

【Nコード】

N7212N

【作者名】

本間敏治

【あらすじ】

『はんこたんな』とは、野良仕事の際、日除け・虫除けのため顔を覆う被り物で、東北地方に今もわずかに残る昔からの風俗である。明日香と彩香は、近所の幼馴染。二人とも、おとなしく、目立たない。そして格好も、遠目で見ると、双子と見間違えるくらい似ている。

高校最後の夏、二人は、就職活動も思うに任せず、淋しい思いをしていた。

明日香は、彩香の部屋で、自分も密かに心を寄せる健一の写真を発

見し、彩香も健一に特別の思いを抱いていることを知る。

二人は、中学2年の夏、臨海学校であやうく溺れそうになり、健一に助けられたことがある。その時に見た、健一の、精悍な顔に不釣り合いな、あどけない笑顔と笑顔に浮かぶ白い歯が忘れられなかった。

毎年慣わしのお寺の清掃デーは、猛暑の今年は、夜、行われた。大量発生したやぶ蚊の攻撃に備えるため、みんな思い思いの防虫服に身を包んできた。明日香、彩香は、お年寄りたちの『はんこたんな』姿に、奇異な、そして特別の感情を抱くのだった。

清掃デーに、健一も参加していた。しかし、健一の横には、すでに許嫁^{いいなすけ}となつた由里の姿があつた。二人は、健一への思いが叶わない夢と知る。しかし、清掃デーの帰りぎわ、おとなし過ぎる二人にだれも注意を向けない中、健一は、臨海学校の時と同じように、あどけない笑顔に浮かぶ、あの白い歯を二人に向けてくれるのだった。もう少女の体ではない二人は、そんな変わらない健一に、激しく心が揺らいた。

その夜、二人は同じ夢を見る。なんと、『はんこたんな』姿であつた。二人は、体の奥から突き上がる欲望に、服をぬぎ、健一を思いながら、そして、一度は剥がし取ろうとした『はんこたんな』をそのまま顔に被つたまま、乙女が夢描く恥じらいの肢体を惜しげもなく繰り広げるのだった。

「1」 物憂げな部屋

ここは、米どころ東北地方の、とある小都市。二人は、地元の公立高校に通う女学生。同じ町内で家も近所の、だれもが認める大の仲良しである。

高校生活、最後の夏だった。

夏の甲子園、東北の学校は野球は弱いとの定説を覆すか、テレビからは、初のベスト4進出を賭けた試合の実況中継が、街のあちこちから耳をつんざくポリウムで流れていた。

明日香^{あすか}は、今日もいつものように彩香^{あやか}の家に遊びに来ていた。

「ねえ彩香、どうしたことが、私たちの学校強いわね」 明日香が、不思議がる。

「……」

「彩香どうしたの、ぼーっとして！」

「うん？… あっ、ごめんごめん、ちょっと考えごとしてた」 彩香は、明日香の言葉で我に返った。

「どうしたの、ぼんやりして。最近の彩香、時々、ふぬけのよう」「そうね、熱中症にかかったのかしら」 彩香は、淋しく冗談を言う。

そんな訳はない。彩香の部屋は、朝からのクーラで効きすぎるく

らい冷えている。

冗談に返す言葉もなく、再び二人は、物憂げにテレビに視線を向けた。

今年の夏の暑さは、異常だ。ここ東北の地でも、連日35度を超える猛暑日が続いていた。自分たちの母校が、今、ベスト4を賭けて戦っている。街中が、テレビに釘付けである。アルプススタンドから、時折、歓声を挙げる見覚えのある応援団の汗だくの顔が覗く。いつもながらの光景とはいえ、今年の甲子園は、猛暑の照り返しの中、例年以上に熱気が渦巻いていた。しかし、ここ彩香の部屋だけは、淋しく物憂げだった。

二人は、ままごと遊びをよくした幼馴染。小・中・高とも学校が同じ、小・中学時代はクラス分けで異なっていた時期もあるが、高校3年間はずっとクラスも一緒だった。

二人ともよく勉強ができた。そして、おとなしかった。スケバン連中から疎まれ、一時、いじめにあつたが、あまりに無抵抗な二人にいつ日か相手にしなくなり、続いてレズではないかとの噂も大きく広まることなくいつの間にか沈静化した。

最終回、1点差で負けていた母校が2アウト土壇場で希望をつなぐ起死回生のホームラン、なんと同点に追いついた。途端、街中がワァーと轟音に包まれた。窓を閉め切った彩香の部屋も、地鳴りのように響いた。が、部屋の二人の間には、今も、沈黙が続いていた。

試合は、そのまま延長戦になった。ようやく、彩香がため息まじりで口を開いた。

「どうしよう、就職」

「そうね、この夏休みが勝負と思っていたけど、お盆で会社休みじゃ、就職活動も開店休業ね」

「地元企業の就職口もこんなに少ないんじゃない？進学しようかな」

「進学？」明日香も、内心、同じ思いを抱きながら訊いた。

「うん、こつも目処めどがたたないんじゃない？かといって、東京の大学で4年間も遊ぶわけにもいかないし…。地元の短大、専門学校で介護の資格でも取るうかしら」

「そうね…。本当、どうしよう」明日香も、ため息をついた。

二人は、同級生の多くが、安易に四大に行くような、そんな気にはなれなかった。地元の優良企業に就職して、良い縁談話があればすぐにでも結婚して早く平穏な家庭が持てればそれで良いと思ってる。多くの、享楽にうつつを抜かす女子とは異なり、今どき、こんな大和撫子やまとなでしこは珍しいが、就職難の今、却って周りからはしっかり者に映った。

「あゝあ…」二人目を合わせ、淋しく何度目かの嘆息をもらした。

「ワァー！」轟音が上がった。部屋が揺れた。次の瞬間、一気に大きなため息へと変わった。

10回裏、延長戦1点先取された母校が、2アウト満塁で最後の打者が三振となった瞬間だった。地元初のベスト4進出の夢は、あえなく崩れ去った。

「負けちゃったね」明日香が言う。

彩香も、静かに応える。「そうね…負けちゃった」

部屋は、相変わらず冷え切っていた。

「2」 写真

「あやかーッ！」下の階から、彩香の母親の甲高い声が聞こえ

た。おそらく応援で声を張り上げていたのだろう、あまりに大きな声は、唐突だった。「びっくり！うるさい声ね…ちよつと行つてく」そう言つて、彩香は部屋を出て行つた。

明日香は、それとなく彩香の部屋を見回した。テレビでは、勝利者チームの監督インタビューが流れていた。彩香のきちんとした性格そのままに、どこも整然としている。もう見慣れたいつもの部屋しかし、少し違う。…もう一度、何気なく見回して、目に入ったベッド脇のサイドボードの中に、いつもは見ない大学ノートがたて掛けてある。狭い背表紙に、小さな字で『中学二年 自由帳』と書いてあつた。あれ？との想いで、よく見た。大学ノートにすぎ間が見える。何かが挟まっている。後ろめたさを感じながらも、ノートを取り出してすぎ間を開けた。写真だ。数枚の写真が挟まっていた。

明日香は、見て、なつかしさにホツとした。中学2年の夏休み、クラスで行つた臨海学校の時の写真。海を背景にクラス全員での大きな写真1枚に、後は普通サイズのスナップ写真が数枚、中学生のあどけない笑顔に溢れた、いかにも楽しいものばかりだ。そんな中に、よく眺めたためだろう、手で持つ右下が他のものより少しよれている1枚があつた。

「あつ！」明日香は、ドキツとした。

「健一君だ！」

男女数人が一緒に写つてはいるが、明らかに一人の男が中心の写真。スポーツで鍛えた逆三角形の背中をこちらに向け、振り向きざまに白い歯の笑顔を見せる青年。当時、学校中の女生徒のあこがれの的だった、小国健一おくにけんいちである。

続いて、当時から健一との仲を公然と吹聴していた、スラリとしたスタイルはモデルのような石面由里いしおもてゆりの姿が目に入った。

彼女は、後ろから健一によりかかろうとしていた。しかし…そ

の由里の顔は、なんと！ カッターナイフでギザギザにされていた。明日香は、恐怖で震えた。

写真をめくって、裏を見た。丸みを帯びた彩香の字で、「健一君、もつと私を見て！」と書いてある。さらに、挟んであったノートのページには、『健一 LOVE』類似の文字が、至るところ書き記してあった。下の階から、人が上がってくる気配がした。明日香は、慌てて写真を挟んで大学ノートを元に戻した。

「明日の町内清掃デー、夕方の6時からだつて」

「えっ？ 朝じゃないの」 明日香は、平静さを装いながら、意外だなという風に言った。

明日は、毎年、盆の墓参り前に行われるならわしの町内清掃デーである。そのことは、明日香も毎年のことだから承知していた。しかし、いつも朝8時からではなかったか。

「そうなのよ。今年は、こんな猛暑でしょ。町内でも何人か熱中症で倒れたんだつて。それで、急きょ夕方の6時に変更になったらしい」

明日香は、朝の8時スタートと夕方6時スターからと、どちらも変わらないと、内心思った。

町内の真ん中に、県内でも有数の由緒あるお寺が、居丈高にデーンと構えてある。町の自治を仕切る町内会長の座は、代々、そのお寺の住職が世襲している。『町内清掃デー』と称し、毎年の決まった行事だといえ、なんのことはない、1年間伸びるに任せたお寺の雑草取りに等しかった。夕方6時への変更も、猛暑を口実にした、単なる住職個人の都合に違いない。今年の夏は、猛暑の他、ボウフラが大量発生した。やぶ蚊の襲撃に、例年以上の注意が必要だ。

「嫌ね……」

「本当……」

苦々しく言い、二人目を合わせた。しかし、まだ鮮明に残るあの写真のイメージがよぎり、明日香は、彩香の眼差しから思わず目をそらした。

街は、さっきまでの喧騒がひき、嘘のように静まりかえっていた。準々決勝次の開始のサイレンが鳴った。明日香は、テレビを消した。

明日香が、おもむろに口を開く。

「ねえ彩香…好きな人、いる？」

「…… そんな人、いない」

……

二人の会話は、こんな風にいつもおだやかに進む。

「そう……」

「明日香は？」

「うん…、私も、いない」

いつも一緒に、だれの目にも気の合う二人、今まで隠しだてなどなかった。二人の会話に、男の子の話題がのぼることも多い。しかし、今日は、いつもと違った。何か特定の人を意識してこんな風に真面目に訊き合うことはなかった。

「本当にいないの？」

「… 本当にいないわよ」

二人とも、嘘をついた。そして、サイドボードの大学ノートの写真を想って、相手に気づかれまいとつつむいて、ポツと顔を赤らめた。

二人は、背格好もよく似ていた。遠目で見ると双子と見間違えかねない。事実、よく間違われた。明日香は、ショートカット。彩香は長髪、いつもポニーテールにしている。髪型を二人変えているのは、見間違えられないようにするための、二人の暗黙の術^{すべ}でもあった。

なんの銜^{てら}いもない二人は、思わず男を振り向かせるような男好きするような容姿ではない。しかし、肌の白さが際立つこの地特有の色白美人である。目立たないだけに、軽薄な男たちは二人の本当の美しさに気づかないだけなのだ。

暫くして、彩香が口を開いた。

「私たちって、男の子に縁がないみたいね」

「そうね」

「高校生活、最後の夏だというのにね」

「…なかなか就職も決まらずに、今年の夏もいつの間にか過ぎて行ってしまうのね」

「なんだか…淋しわね」

「…うん、淋しい」

「ハハハ…」

「ハハハ…」

二人、静かに、そして淋しく笑った。

「3」 はんこたんな

翌日も、うだるような暑さだった。境内前の庭には、すでに多くの人が集まっていた。住職の説教が続いている。もう15分にもなるうか。夕方6時過ぎとはいえ、人いきれも手伝ってもう庭は蒸し風呂のよう、人びとの額はもう玉の汗だった。

「それでは、みなさん、ご苦労様ですが、境内裏の墓地を中心に

いつものように手分けしてお願いします」

住職の冗漫な説教がようやく終わった、と安堵する間もなく、野^{ほつす}放図にはびこる藪と墓地を横切るとぶ川が脳裏をよぎり、みんな一様にしり込みした。家族を代表して参加した明日香、彩香も恐怖におののいた。

実は、猛暑がまだ予感できない時期、この一帯は、2度、あわや床下まで浸水するかというほどの集中豪雨に見舞われた。そして、その影響でボウフラが例年になく異常発生した。人びとは、猛暑が続くこの数日、熱さ以外に大量のやぶ蚊に悩まされてもいたのである。それでも100人以上集まっただろうか、各家庭一人づつでかつ自由参加でいいとはいえ、あの住職の鋭い眼光で参加者一人一人チェックされているかと思うと、嫌でも参加しないわけにはいかなかった。しかし、今年はちよつといつもと様子が違う。いつも以上に主婦の参加が少ない。いつもながらの世話役的存在の男衆等に交じって、年寄りたちの姿がやたりに目立つのだ。夕餉^{ゆうげ}の支度の時間に重なった上、母校の応援のため、いつもボランティアで来る学生の多くが甲子園に駆り出されたからでもある。

回覧版で、防虫への備えの注意喚起が事前に徹底されたためか、長袖のシャツ、長ズボン、軍手に帽子、そして顔はタオル、手ぬぐいでほかぶり等、みんな思い思いのかっこうに身を包んでいた。さつきから、血に飢えたやぶ蚊が、ぶんぶんうるさくその防中服の周りを無遠慮に舞っていた。移動もせず長時間一つの場所に立っているこの集団は、恰好の餌じきだった。見る見るうちに数が増し、いつの間にか大群に包まれ、もう、頭の上一帯が黒づんで雲をなしているように見えた。

みんな、手に持っているタオルや手ぬぐいで、襲い来る吸血鬼を退散させることに余念がない。そんな中に、黒づきんのようなもので顔を覆った忍者のようないでたちの老婦人の姿が至る所随所に目

に入った。酷暑の中、全身防虫服に身を包んだ姿自体奇抜だが、至る所忍者姿がかいま見えるこの光景は、さながら、隠密を従えこれから悪玉庄屋あくだまじょうやを打ちのめそうと集まった農民一揆の集合シーンのようで、なんとも異様だった。

> i 1 1 3 9 2 — 1 6 2 6 <

ー はんこたんな ー

少なくなつたとはいえ、今でも山形県の酒田・鶴岡等庄内平野を旅すると、野良仕事をしている女性の中に紺かすりや紫紺綿しこんで作られた布で顔を隠し、わずかに眼だけを出している姿を時折見かける。まるで、覆面のようなこの被り物は、『はんこたんな』と呼ばれる。『はんこ』は半分という意味、「たんな」とは「手綱」という字を当てる。

『はんこたんな』は、日除け・虫除けとして昔からの風俗だが、昔、庄内地方を牛耳る殿様に好色な殿様がいて、美女と見れば片ぱっしから城内へとさらっていったので、素顔での野良仕事は危ないということから、自然に『はんこたんな』で顔を隠すようになったとの言い伝えが残っている。

明日香、彩香が住むこの地では、さすがに今、普通に見ることはないが、同じ米どころ、そして今も多くが農家であることを考えれば、『はんこたんな』はこの土地にも伝播し、今、目にするおばあちゃんたちの頃は、普通のいでたちだったのだろう。

明日香、彩香は、中学2年の夏、同級生みんなして日本海へ臨海学校へ旅行した時のことを思い出した。

帰路に向かうバスは、国道7号線沿いの、ある道の駅に停車した。トイレ休憩のためだったが、土産物を買える最後の場所ということ

で少し長めの時間が与えられた。

「ハハハ」

「ハハハ… なに、それっ！」

「ギヤハハハ」

一斉に、爆笑が起こった。土産物屋の一画で、『はんこたんな』の実演が行われ、みんな、思い思いに試着しているところだった。『はんこたんな』については、臨海学校へ向かう道すがら、バスの窓から野良仕事をしている『はんこたんな』を目にし、またバスガイドさんからもそのいわれなど説明を聞いていたので知識は得ていた。

特に、男の子たちが面白がった。しかし、実演モデルがやるようにはなかなかうまくいかない。 >br<

「なんだよ、それ。逆さまだどお」

「アハハハ、まるで忍者だな」

「おい、目まで隠したらみえないどお」

「おい、それじゃエロ殿様に連れていかれるっぺ」

「ふざけんな、おらあ、男だどお」

「アハハハ」

「アハハハ」

明日香と彩香は、いつものようにみんなの輪からは少し距離を置いて、みんなの行動を静かに見ていた。

「おもしろいね」

「本当」

「ウフフ」

「ウフフ」

「4」 健一、そして由里

明日香と彩香は、気になっていた。今、二人の前を歩く男の存在を。100人以上も集った境内の庭では気がつかなかったが、住職のスタートの合図で、各自墓地へそれぞれの持場に行く途中、背丈がひときわ抜きんでている男。野球帽をかぶり、サングラスはしているが、180?を超える身長と、長袖のスポーツシャツの上からもそれと分かる逆三角形の筋肉は、まぎれもなく健一だった。その健一が、今、目の前を歩いているのだった。

隣町の彼は、学生ボランティア組みでの参加だった。N市にある県下一の進学校へ行っていた。街でごくまれに見かける彼は、見るたびに遅しくなっていた。聞くところによると、成績優秀に加え、ラクビー部キャプテンとして、学校推薦ですでにN市の有名国立大学への入学が内定しているという。そんな健一は、今も飛び抜けてカッコよかった。

前を歩く健一のたくましい背中が、少し傾きかけた夕日に映え、輝いていた。「健一君」と声をかければ聞こえる距離なのに、二人はただうっとりとその背中を見つめるだけだった。

「けんいちー!!」 後ろから、二人の頭ごなしに女の声が飛んできた。

健一が振り向いた。

思わず、二人は目を伏せた。

「よおーっ!」

「ごめんなさい、中学の時の友達の所で長くなっちゃった」

……

「由里?」

わざとらしい甘ったるい声は、やっぱり石表由里であった。

由里は、明日香と彩香の横を小走りに走り過ぎ、なんの躊躇もなく、健一の二の腕にしがみついた。石表由里は、身長175センチ、

スラリとした6心頭美人。スラリとしたスタイルはモデルのよう。ピンク色が目立つ上下のスポーツウェアに身を包み、髪はおおかみヘアーで、やはりピンクがかった染めがはいっていた。長身の健一と由里が、こうして並び、よりそう姿は誰の目にもカッコよく映った。

” 健一と由里の関係は、まだ続いている？ ”

健一とは、今でもたまに街で見かけることもあったが、由里は、中学3年の夏、父親の転勤でN市の学校に転校したはず。由里をこうして見るのも、従って、もう3年振りのことである。

「ねえ、お父さんとお母さん、私たちのこと許してくれるかしら」

「大丈夫だよ、前もってよく言っておいたから。今度の夏休み連れてくる人は、結婚を前提につきあっている人で、父さん母さんもよく知っている人だよってね。僕たち、よくN市で会っていただろう、そんなところ父さん母さんも薄々感じていたみたいだ。でも、まさか出来ちゃった結婚とはね… そこまではさすがに… そのこと話した時の二人の顔ったらなかったな、ハハハ」

「そうね、ハハハ」

「由里、身体は大丈夫？」

「うん、順調よ、先生も太鼓判押してくれた」

「元気な子だといいね」

「私たち、幸せになろうね」

「えっ！ ウソッ！！」

聞き耳を立てていた二人は、固まった。

” 結婚前提？… 早すぎる、まだ高校生よ。” それに出来ちゃった結婚？… って… えっ、赤ちゃん？… うそでしょ ”

だんだんと苦しくなってきた。由里が恨めしかった。そして、激

しく嫉妬した。

明日香と彩香は、歩くお互いの存在を忘れていた。

……

「ねえ、あすかちゃんたち、あんたらどこさいくべえ」

近所のおばさんに呼び止められ、現実現実に引き寄せられた。

「あんたら、おらたちと一緒にの班だど、その長谷部さんちからあっちの磯部さんちの墓までだ、まあ、暑かばよってゆっくりやるべーさ」

「5」 メタファ（隠喩）

間もなく8時になる。夜はすっかり帳とけを降ろしていた。

山と積まれた雑草が赤々と燃えている。ここ数日雨がなく乾燥しきった雑草は、なんの苦労もなく燃え盛った。メラメラと火の粉が空を舞った。真夏のたき火は、一仕事終え汗にまみれた身体にむしる心地よい。

境内の庭に用意されていた氷水は、すっかり溶けていた。この時間に合わせるように、町内会の酒屋から大量の飲み物が運ばれてきた。につくきバンパイアも、たらふくの人血にもう食傷気味になったのか、ようやく影をひそめた。飲み物の中には、冷えたビールや冷酒もある。回覧版では、この後有志で住職との懇談会が予定されている。なんのことはない、町内会費を使った体ていのいい飲み食いである。それをあてにしてか、常連の世話役達の周りは、もうすでに酒盛りが始まっていた。

燃え盛る雑草の山を前に、配られた飲み物を手にして、ようやくみんな顔を覆っていた物を取り始めた。最初、スワツ！農民一揆かと恐れた異様な光景は、一変した。平凡でたわいない、いつもの寄合に戻った。

不思議なものだ。素顔を隠す被り物があるのとないのとは。見

る者を完全に当惑させる。手ぬぐい程度ならまだしも、『はんこたんな』のように顔全体を忍者のように覆い隠し、見えるのはキヨ口キヨ口動く目ん玉だけとのいでたちは、一種、脅威だ。体型とか仕草で推し量るか、恐いけど思い切って話しかけるなどしなければ相手を察知できない。

さっきまで所々に散在していた『はんこたんな』姿は、本当に不気味だった。しかし、この『はんこたんな』達をよく働いた。雑草を刈る単調な動作を、黙々と繰り返すのだった。こんな『はんこたんな』達の一系乱れないで働く姿は、抱いていた恐さ、不気味さを超えて、次第に畏敬へと変貌させる、意図しない力を持っていた。明日香、彩香も、そして他の多くの人も、最初は嫌で嫌で仕様がなかった。しかし、なんの不平不満も漏らさず、黙々と決まった作業を繰り返す『はんこたんな』を横目に見て、最初はお喋りに興じていた人たちも次第に言葉少なくなり、催眠術にかかったかのようにいつしか同じように黙々と仕事に専念するようになっていくのだった。『はんこたんな』には、こんな人を動かす、あるいは抑制、統制させる力があつた。それは、本来の自分じゃないとみんな薄々感じながらも、本当の自分、最も抑制が解き放たれた^{たと}譬えで言うならばそれは本能だろうか、こうした本来の自分、本当の自分をじわじわと抑えつけるような強制力を『はんこたんな』には備わっているように見えた。

『はんこたんな』姿の年寄りたちも、その被り物をやおら解き始めた。みんな、知った顔だった。そこには、なんとも憎めない、思わずこちらにもニコツとするようなほのぼのした会心の笑顔があつた。

「6」 白い歯

明日香と彩香は、被っていた帽子と頬かぶりしていた手ぬぐいを取り、肩にかけていたタオルで額の汗を拭き、そして最後にコーラをゴクゴクと2口ほど口に含んだ。二人とも、仕草が同じだった。

今さらこんな二人の動作を見て双子だと言う人は、もう近所にはいない。しかし、二人を知らない人は、「やっぱり双子さあ、よお似てるのぉ」などと、はやし立てたことだろう。

しかし、二人の同じこの動作は、今でも周りの視線を集める程度の効果はあった。

燃え盛る火の向こうから、白いものが光った。サングラスをかけた健一が、こぼれる笑顔に白い歯をみせて、「よぉー！」と軽く手を挙げた。明日香と彩香は、一瞬ビクツとした。しかし、すぐに軽く頭を下げ、ぎこちなく笑顔を返した。

健一に寄り添って何か話かけていた由里は、健一のその動作に、条件反射で明日香と彩香の方に顔を向けた。しかし、だれだっけ？と訝^{いぶ}かしげな顔をした後、取るに足らないとも言ってしまうようにちょっと会釈するや、すぐに健一へのお喋りを再開した。

明日香と彩香は、「なつかしい」と思った。凜々しい健一にちょっと不釣り合いだが、なんとも人なつこい笑顔、そして笑顔に浮かぶ白い歯になんとも言えない懐かしさ、そして優しさを覚えた。

嬉しかった。「あの時と同じ。今も全然変わってないね、健一君」明日香と彩香は、そう心の中で健一に話かけた。

Ⅰ 4年前の夏、日本海、臨海学校 Ⅰ

遊泳禁止区域を示すブイが張られている。海辺から50m位だろうか、この張られたブイを折り返す水泳競技の時間だった。

明日香と彩香は、スポーツ音痴、特に水泳は大の苦手だ。折り返し100mもの距離は、二人にはなんとも過酷だった。女子はハンディが与えられ少し前からのスタートで、少女少女が一斉に海を目指して砂浜を駆けていった。

お揃いの黄色いキャップの一団が、バチャバチャと小刻みに水をはねる。明日香と彩香は、すでに先頭集団から大きく後れをとって

いた。先頭集団から数人が抜け出した。5、6人が同時に、浮いているブイに触れた。ここからは、海辺を目指す。トップグループは、ほとんどが水泳部員。得意の泳ぎでリズムカルに身体を進める。その中に一人、泳ぎはぎこちないが、水泳部のリズムカルに決してひけをとらない力強さで泳ぐ健一がいた。健一は、陸上部員だ。しかし、体格は群を抜いていた。折り返し後、海辺まであと半分にさしかかる頃、体格の潜在力が顕在化した。力の違いが誰の目にも明らかだった。健一の力強さが、水泳部の泳ぎのスキルを凌駕りようがした。この時点を起点に、グイグイともう他を寄せ付けない。10m以上離しての圧勝だった。

「よーッ！健一、さすがだな」金八先生ばりの熱血先生、三平先生が、ゴールした健一に声をかけた。

「ピーッ、ピーッ、ピーッ、頑張れよ！」三平先生は、ホイッスルの合間に、黄色いキャップの海の戦士たちに向かって大きな声で声援している。

健一は座るでもなくそのままの姿勢で、三平先生の横で息を整えていた。次々と、黄色キャップ達が上がってきた。三平先生は、その度に一人一人に「よくやった、ご苦労さん！」と忙しく労ねぎいの声をかける。しかし一方で、後続組が気になるのだろう。すぐに、望遠鏡で遠くを望む姿に戻るのだった。視線の対象は、最後尾の二人、明日香と彩香だった。

先生にとって、順位は関係ない。とにかく事故がないことが第一だ。周りには、疲労困憊した生徒たちが砂に大の字となっている。彼らに後続の状況を気にする余裕などなかった。気にしているのは、無精ひげの三平先生と逆三角形の健一だけだった。

明日香と彩香は、悪戦苦闘の末ようやく中間点のブイの位置にたどり着き、今、隣同士のブイにそれぞれ身を寄せ、息をついているところだった。

「彩香、大丈夫？」

「うん、明日香は？」

「ありがとう、大丈夫…でも、しんどいね」

「ああ、疲れた」

「私たちって、いつもこうね」

「しょうがないわ…でも、最後まで頑張ろう」

「そうね。どうせ、みんなこんな私たちに気なんかかけてくれな
いし」

「うふふ… もう、慣れっこね」

「ハハハ」

「あら、明日香ったら、以外に元気ね」

「そろそろ行こうか」

「うん」

「先生、あの二人大丈夫でしょうか？」 すっかり息が整った健
一は、望遠鏡を覗く三平先生の顔を窺う。三平先生は、遠くを望む
そのままの格好で答える。

「おお、いつものこととはいえ、今日は海の中だからな… だけ
ど、あの二人は我慢強いよ。粘りじゃ、誰にも負けないな。いつも
ビリだけど、文句も言わず悪びれた態度も見せないで最後までやり
遂げる、感心するよ…それにしても、あの荒くれボート気になるな」

その時だった。禁止区域の近くで盛んにジグザグの旋回を繰り返
し、海水浴者たちから顰蹙を買っていたモーターボードが、急にウ
ターンした。かと思うと、反対から押し寄せてきた波に舐先がグイ
ツと持ちあがった。一瞬止まったかのように見えた。とその瞬間、
後ろに反転した。あちこちで激しく波がぶつかり合った。そして、
海辺を目指して懸命に泳いでいる二つの黄色のキャップを背後から
襲いかかった。

「危ない！」 三平先生が叫ぶが早いか、健一は、獲物を追う豹の如く走っていった。三平先生も、後を追った。

明日香と彩香は、大きく波に吞まれた。ゴボゴボ… 海に引つ張られていった。「なんとかしなければ」、と思った。必死にもがいた。海の底に呑みこまれる、… 死を実感した。次の瞬間、何かで上に引つ張られるのを、かすかに感じた。そして、意識を失った。

どのくらい経ったのだろうか。「おゝい…」 遠くから人の声が聞こえる。だんだんと大きくなってきた。「おい、しっかりしろ！」 明日香と彩香の前に、男の顔が現れた。朦朧とした意識の中で、救われたと思った。次第にはつきりしてきた。健一の後ろに、三平先生の無精ひげが見える。そして、背後には黄色のキャップたちが心配そうに覗きこんでいる顔があった。

「大丈夫か」

「うん…」 明日香と彩香は、かすかに頷きながら呼びかけに答えた。

その瞬間、ワァーと大きな歓声が湧いた。

太陽がまぶしく、逆光の光を投げる中に、精悍な顔に不釣り合いな、人なつこい満面の笑みと、満面の笑みに浮かぶ白い歯があった。満面の笑みに浮かぶ白い歯は、太陽の光に360度反射するダイヤモンドの輝きだった。二人は、暫くその白い歯をうつとりと見つめていた。「今、健一君に見られている」 健一に見られていると思うと、ずっとこのままでいたい、このまま健一に身をまかせていたいと思った。幸せを感じた。

「7」 幻想

燃え盛っていた火は、今、半分ぐらいまで勢いが衰えていた。酒

盛りの世話役たちは、「さあ、中で飲もう」と、下品な高笑いを交わしながら境内に入って行った。お喋りに興じていたご婦人たちは、手にした飲み物を飲み干したと気づくや、それが潮時と、申し合わせたように次々と家に帰って行った。はんこたんなのお年寄りたちも、いつの間にかいなくなっていた。

由里の「行こう」との合図に、健一も背を向けようとした。しかし、忘れものに気がついたかのように、背を向けたまま振り返って、明日香と彩香に向かって手を挙げ、微笑みながら、「じゃ、又」と言っているように軽く会釈を投げてきた。満面の笑みではないけど、また水着姿ではないけど、明日香と彩香は、写真の振り向けざまのあのポーズと同じだと思った。二人は、黙って会釈で返した。

明日香と彩香は、衰えつつある火をじっと見つめていた。沈黙に耐えかねて、彩香が口を開いた。

「健一君、変わらないわね」

「うん」

「……」

「……」

「健一君と由里… お似合いね」

「…… そうね」

心にもないことを言った。そして、心にもない言葉は、却って沈黙を助長してしまった。

また、二人は黙り込んだ。

> i 1 1 3 9 6 — 1 6 2 6 <

夜は、すっかり更けていた。人影はなくなった。空にはオレンジ色に満月が浮いていた。火は、静かにやさしく燃えていた。火もオレンジだった。境内から酒盛りの高笑いが聞こえるが、前の庭は静

寂に包まれた。黒とオレンジの世界だった。

その夜、二人は同じ夢を見た。

海にいる。夏の日本海は、波も穏やかだ。真夏の太陽が、まぶしく光を放つ。昼間だというのに、人影はない。

いつも一緒の明日香、彩香は、今日は一人だ。いや、隣り合わせにいないだけだ。目の前にいないだけで、離れた位置でお互いを意識しながら、同じ行動をとっていることをうすうす感じている。見えなくても、近くで同じように歩いているお互いを感じ合える。しかし、この夢の世界では隣り合わせは憚^{はばか}れる。相手も同じことをしていると分かっているにしても、この夢の世界ではやはり隣り合わせは憚れるのであった。

海を見ていた。静かだ。人の気配は？…と思うや、自分の身なりが気になった。驚いた。こんなに暑いのに、全身、身につけたこともないもので覆われていた。昔のモンペ服？と憚^{いぶか}るや、手が頭にいった。頭だけでなく、顔全体が紫紺の布で覆われていた。「やっぱり、はんこたんな！」なんと、昔の野良仕事ファッションである、はんこたんな姿に身を包んでいたのである。

しかし、身につけたこともないのに、何故か着心地はそれほど悪くない。楽だった。はんこたんなに身を任せていれば、自分の意見を主張する必要もなく、平穩無事が約束されているような気分だった。

岩に座って、再び海を眺め始めた。静かな時間が過ぎる……これだけ時間が経過しても、人影がない。”だれもない。ここは、自分だけだ。”と納得すると、今度は急に感情の高まりを覚えた。すると、さっきまで安全が保証されていると安心したはずのこのはんこたんなの姿が、疎ましくなった。感情が高揚し気持が大きくな

るにつれ、身につけているこの異様ないでたちが邪魔になった。

「こんな格好、本当の私じゃない。こんなの本来の自分ではない」と叫んだ。着ているものを脱ぎ始めた。ほとんど衝動だった。衝動的に、裸になりたいと思った。何も考えず裸になった。締め付けられていた胸が解放されて、なんとも気持ちよかった。色白の裸体は、夏の光の中でピュアに輝いていた。眩まぶしかった。裸の身体に、海からのそよ風が心地よい。そよ風が、白い肉体のいろいろな凹凸おうつに当たる。その度にその微妙な箇所が意識される。もう、少女の体ではない。

「だれかに触れられたい」と思った。とその瞬間、顔を意識した。思わず慌てて顔を触った。『はんこたんな』だ。不思議に思った。「どうして?」 どうしてはんこたんな取っていないの?」「今、私は欲望の渦に入ろうとしている。この渦にうごめく欲望の深淵を極めたい、と願っている。本能に全て身を任せたいと。今、このはんこたんなを剥はせば、この体を突きあげる欲望をもっと知ることができるのに」と、いてもたってもいられない思いではんこたんなに手をやった。……熱いものが、スーツと引いた。はんこたんなから声がした。「剥がした途端、欲望の墮落の世界に落ちるぞ」と。この声に、少し冷静さを取り戻した。「そうだね、今はまだ外してはいけないんだわ。剥がしたら、最後のモラル、最低の羞恥心までも失ってしまう。そう、本当に好きな人に合うまでは、本当に好きな人に見てもらうまではこれはつけていなくてはいけないんだ」と悟った。

> i 1 1 3 9 4 — 1 6 2 6 <

「本当に好きな人: 健一君、やっぱり健一君が好き。どんなにライバル多くても、この気持ち抑えられない。どうして、もつと積極的になれないのかしら。おとなし過ぎるわ、私たち」 明日香と彩香は、お互いを感じ合いながら、こう思った。

「だれも、おとなし過ぎる私たちを気にかけてくれないけど、健一君だけは違った。あのあどけない笑顔、あの白い歯に会いたい。私を見てもらいたい。私、もうこんなに大人になっているのよ。そして、あの逞しい二の腕に抱かれたい」

二人は、だんだんと幻想の世界に引き込まれていった。

はんこたんなの効用、威力を察知した二人は、今一度、周りに人影がないことを確信するや、もつと大胆になった。健一を想い、普段思いもよらないようなポーズをとるのだった。いつの日か、好きな人に全てを捧げる準備として、今が絶好のチャンスとばかり、男女経験のない乙女が考えうるあらゆる肢体を示すのであった。天にも昇る思いだった。こうして、好きな人を想い、欲望の赴くままに自分を誇示することは、なんという快樂なんだろう。しかし、完全ではない。人氣がないこの海で、自分たちしかいないと確信できるからこそそのポーズである。

「完全な時は、好きな人、健一君を得たとき。その時は、これはんこたんなも剥ぎ取って、100%の快樂を健一君と享受するわ。今だって油断は禁物。どこかに人が隠れ潜んでいるかもしれない。まだ健一君が自分たちのものでない限り、こんな大胆な姿を公に晒すわけにはいかない。はんこたんなは、まだ健一君と結ばれていない以上、今、社会との秩序を保つため、そして社会との秩序を保つことを忘れないようにするための警報機みたいなもの。女としてのつつしみを気づかせてくれるアラーム」と、はんこたんなを最後のモラルを逸脱しないための抛り所と意識することによって、今、恍惚と幻想の中で展開している様々なポーズ、肢体を正当化するのだった。

1%のモラルにかろうじてしがみつ、こうして99%の欲望に身を任せて、これまで抑圧されてきたものの全てを発散させんばか

りの肢体や、こうした欲望とモラルの狭間に揺れる乙女心の発露は、まさにエロスの極みと言えた。

明日香と彩香は、さまざまな肢体を試みながら、健一のことを想い、喜びの絶頂にあった。太陽の光が、砂浜を照り返す。白い肌は、玉の汗をのせてますますみずみずしく光る。何かを期待するかのように、少し足を広げてみた。胸の頂に手を触れてみた。目を閉じた。

幻想の中、「おゝい……」 遠くから人の声が聞こえる。健一君？ 太陽がまぶしく、逆光の光を投げる中に、精悍な顔に不釣り合いな、人なつこい満面の笑みと、満面の笑みに浮かぶ白い歯があった。健一君だ！「健一君」と呼ばうとした。次の瞬間、「けんいちっ！」「後ろから、頭ごなしに女の声が飛んできた。健一の顔が、突然、ピンクの染めが入った由里の顔に変わった。しかし、由里のその顔は、カッターナイフでギザギザに刻まれていた。

……

二人は、夢から覚めた。

今日も猛暑が容易に予感できるくらい、朝から晴れ渡っていた。この夏休み毎日のように会っていた明日香と彩香は、夢から覚めたこの日だけは、自分の本性を相手に感じ取られることを恐れて、お互い連絡をとることがなかった。

完

制作：2010年（平成22年）夏

> i 1 1 3 9 7 — 1 6 2 6 <

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 1 \\
 & 1 \\
 & 1 \\
 & 3 \\
 & 9 \\
 & 5 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 6 \\
 & 2 \\
 & 6 \\
 <
 \end{array}$$

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7212n/>

はんこたんな幻想　－真夏の乙女の夢－

2010年10月28日03時00分発行